

2018 年 2 月 18 日 主日礼拝メッセージ

使徒言行録 21 章 17 節～26 節

「キリスト者の自由」

今、ピョンチャンオリンピックが開催されていて、昨日は、男子アイススケートが燃えましたね。羽入君、復活、66 年ぶりの二連覇とか、宇野君も銀で、日本人が 2 人表彰台に載るのは史上初とか、盛り上がっていますね。

ご覧になりましたか。

わたしは、実はあまりオリンピックには興味はないのですが、そんなわたしでも、美しい演技に感動させられました。

それでも、やっぱりこれからの時代は、ますます、教会のなかで、オリンピックの話題は、慎重にならないといけないとおもうんですね。

多文化の人々が、この日本に沢山生き始めている、多文化共生時代にはいっているわけですから。

教会に集まっている人々も、今は日本人が多いですけども、それが当たり前ではなくなる時代もやってくるでしょう。

そうなれば、日本がいくつ金メダルを取ったとか、数を数えるような、もう、そういう、自分の国だけしか見ないという、ナショナリズムは、だんだん時代遅れになっていくんじゃないかと思いますね。

最近、夕方の礼拝では、ミャンマーの人やナイジェリアの人が、たまに来ます。

幸い日本語ができる方々なので、一緒に礼拝できますけれども、でも、彼らには、あまり日本の金メダルの話題は、しない方がいいでしょうね。

同じイエス・キリストを信じていても、民族や国を越えて、共に礼拝し、共に生きるということは、

一番最初の教会の時から、そう簡単なことではなかったというか、

むしろ、もっとも乗り越えなければならない重大な課題でもあったわけです。

約 2000 年前に、一番最初の教会が生まれたとき、その教会は、ユダヤ人だけの集まりでした。

ユダヤ人の中から、イエスこそがメシア、キリストだと信じた人々が、教会の集まりを作っていったわけですね。

ですから礼拝をするのも、家庭で集まったり、ユダヤ教の神殿にいったりして礼拝したのです。

ユダヤ教の神殿には、割礼を受けていない外国人は、入れないのでから、

当然、エルサレムにできた最初の教会は、割礼のあるユダヤ人のみであったわけです。

割礼というのは、生まれて 8 日目の男の子の体の一部に傷をつけて、神の民のしるしとすることです。

律法に定められた大切な決まりです。

イエスさまも、ペトロたち弟子たちも、みんなユダヤ人として、割礼を受けていました。

ですからエルサレムの教会は、外から見たら、ユダヤ人の集まりとなんら変わらない、ユダヤ教の一派とされていたわけです。

ただ、ユダヤ人ではあるけれども、ユダヤ人が待ち望んでいた救い主、メシアは、ナザレのイエスなのだと、信じた人々の集まり。

ユダヤ人クリスチャンの集まりが最初のエルサレムの教会です。

私たち日本人の教会は、このエルサレム教会をイメージしやすいと思いますよ。

わたしたちの教会も、ほとんど日本人の集まりですから。

そして最初の教会も、ユダヤ人だけの集まりだったわけです。

ただ、救い主、メシアは、死から復活した、イエスだと信じていた。

さて、今、私たちも、死から復活したイエスこそ、救い主、メシアと信じています。

しかし、割礼はしませんね。ユダヤ教の律法の、特に文化的な部分、慣習については、守っていません。

十戒は大切にしていますよ。神だけを神とすること。殺してはならない。姦淫してはならない。

こういう文化を越えた普遍的な教えは大切にしていますが、割礼やユダヤのお祭りなど、律法に書いてあっても、それをわたしたちは、行ったりはしません。

なぜなら、わたしたちはユダヤ人出身のクリスチャンではなく、異邦人出身のクリスチャンだからです。

使徒パウロは、異邦人に福音を伝える時に、異邦人に、割礼を強いたり、ユダヤ人の慣習を守るようには、教えなかったのです。

異邦人は異邦人のままで、主イエスを信じて救われるのだから。

日本人は日本人のままで、主イエスを信じて救われるのです。

神は、律法を守るという、人間の行いのご褒美として、救いを与えるのではない。

それでは、神と人との取引でしょう。

福音は取引ではなく、神の一方的な恵みです。使徒パウロは、それを神の啓示として受け取って伝えた人なのです。

エフェソの教会に宛てた手紙の中で、パウロは、こう書いています。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためです」(エフェソ 2 : 8 -)

わたしたちは、神の恵み、一方的な愛のプレゼントを、

ただ信仰によって受け取るのです。だれも自分の力で救われたのだと、誇らないためにと、パウロは教えています。

こんなに有り難い救いはありません。このありのままで、神はわたしたちを愛し、救ってくださるのですから。

だからこそ福音。良い知らせになるのです。

しかし、このパウロが天から受け取った、「福音理解」が、

ユダヤ人からクリスチャンになった人々には、どうも納得がいかなかった。理解できなかったのです。

なぜ、自分たちが先祖から受け継いで、今まで大切に守ってきた律法、わけても、割礼という重要な、神の民のしるしを、ないがしろにして、

そのままで異邦人が、救われるというのか。

それはあまりにも、都合がいい。パウロの教えは、間違っていると、

パウロに批判的な、ユダヤ人クリスチャンがいたのです。

イエスを信じるだけではだめだ。異邦人も、割礼をしなければ、救われないと、教えていたユダヤ人クリスチャンがいたのです。

そして、異邦人クリスチャンと、ユダヤ人クリスチャンの間に、議論と緊張が高まったとき、

これは一度集まって、話し合わないといけない、ということにあって、

エルサレムに双方が集まり、会議をしたのです。これをエルサレム会議と言います。

エルサレム教会の代表は、今日の箇所に出て来た、ヤコブです。イエス様の兄弟だった人です。

そして、異邦人教会の代表は、パウロたち。

そして、話し合った結果、いったん、この問題は、解決しました。

どのように解決したのかといえば、

異邦人からクリスチャンになった人たちも、確かに神の恵みで、救われたのだから、もう「割礼」はしなくていいということになりました。

でも、今までのように、絞め殺した動物の肉と血とか、異教の神に供えた肉を食べたり、異教の風習のまま、みだらな行いをするのはやめてほしい。

それは救いとは関係ないけれど、ユダヤ人のクリスチャンが

嫌がることだから、やめてほしいということです。

そうやって、お互いが歩み寄って、この話し合いによって、この問題は解決したはずなのです。

このことは、使徒言行録の 15 章に書かれています。

ところが、その後に、さまざまな教会に宛てて書かれた、パウロの手紙を読むと、

どうも、この取り決めをしたあとも、まだ納得していないユダヤ人クリスチャンがいたようなのです。

そういう人たちが、異邦人の教会にやってきては、異邦人クリスチャンも、割礼をするべきだ、律法をまもれと、教会のなかをかき回したようなのです。

クリスチャンになったばかりの、異邦人の人々にしてみれば、

エルサレムのユダヤ人クリスチャンは、信仰の先輩、大先輩です。

しかも、直接イエスさまと出会っている人もいたわけです。

異邦人クリスチャンは、直接イエスさまを見た人はいないでしょう。

エルサレムの教会は、そういう意味で権威があったし、

ある意味、偉いクリスチャンの集まりだったのでしょう。

そのことを感じさせるエピソードが、パウロが書いた、ガラテヤの手紙の中に出てきます。

パウロやペトロが、異邦人のクリスチャンたちと、たのしく食事をしていたのです。

おそらく、食事のメニューは豚肉料理です（笑）。ユダヤ人は豚肉を食べてはいけないと、律法で禁じられていたけれど、パウロもペトロも、異邦人のクリスチャンと同じものを食べようと、豚肉を食べていたんじゃないか。

なかなかおいしいじゃないかといいいながら（笑）。

ところが、その食事の席に、エルサレムから偉いクリスチャンたちが突然やってきたのです。

そのとたん、ペトロは、これはやばいと思ったのか、豚肉をあわてて飲み込んだか、はきだしたか、とにかく、そそくさと、そこから身を引いたのです。

パウロはそんなペトロを叱責して、いったのです。

「あなたはユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をしないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のように生活することを強要するのか」と。

ペトロよ、あなたは今、異邦人と一緒にユダヤ人が食べてはいけないものを、おいしそうに食べていたじゃないか。

異邦人と同じ生活をしていたじゃないか。

なぜ、エルサレム教会の偉い人たちがやってきたら、ビビってしまって、

わたしは異邦人とは違いますよと、偽るのか、とパウロは怒ったのです。

異邦人もユダヤ人もなく、みんな神の恵みによって救われる。

そう口では言っているけど、頭では理解しているけど、

まだペトロはぶれているのです。人の顔色を見て、恐れているのです。

しかし、パウロはぶれません。

異邦人は異邦人のまま、神の恵みによって救われるのだ。

異邦人に割礼は必要ないのだと、徹底して主張していたパウロ。

そんなパウロに、エルサレムの一部のクリスチャンたちは、反感を抱いていたのです。

同じクリスチャン同士でも、主イエスを信じるもの同士でも、なかなか乗り越えられない壁がありました。

さて、先ほど朗読された聖書の箇所は、異邦人に福音を伝える旅を終えたパウロが、どうしても、エルサレムにいかねばならないと、「聖霊」に促されて、エルサレムにやってきたときの話です。

このあとパウロは、ユダヤ人たちに捕らえられて、大変な目に合うことになります。パウロの受難です。

しかしその前に、パウロは、エルサレムの教会を訪ねました。ユダヤ人クリスチャンたちと、交わりをもったのです。

17 節からもう一度読みます。

「わたしたちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。

翌日、パウロはわたしたちをつれてヤコブを訪ねたが、そこには長老がみな集まっていた。

パウロは挨拶を済ませてから、自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを、詳しく説明した。

これを聞いて、人々は皆神を賛美し、パウロに言った。

「兄弟よ、ご存じのとおり、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。

この人たちがあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』といって、モーセから離れるように教えているとのことですよ・・・」

パウロはここで、エルサレム教会の、ユダヤ人クリスチャンと、共に喜びあっています。

異邦人の教会が沢山出来たこと。イエス様を信じる教会が広がったことを、共に喜ぶのです。

ただひとつ問題がありました。

エルサレムの教会のなかに、パウロに反感を抱いている一部のクリスチャンがいて、

あらぬ噂を広めていたのです。

それはパウロが、異邦人だけではなくて、あちらこちらにいる「ユダヤ人」にも、割礼をやめろ、ユダヤの慣習を、捨てると言っているという、根も葉もない噂でした。

今の言葉で言うなら、「フェイクニュース」です。

嘘の噂を流して、情報操作をしていた、ユダヤ人のクリスチャンがいたのです。

パウロは、そんなことは言っていないのです。異邦人には割礼は必要ないとはいったけれども、ユダヤ人にまで、止めてしまえとは言っていないのです。

パウロは手紙の中で、

「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、私自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです」と言っています。

パウロは、ユダヤ人にはユダヤ人に合わせて生きる。そう
しているのです。

そのパウロが、ユダヤ人に向かって、「割礼などしなくていい。
ユダヤの慣習などどうでもいい」と言うわけがありません。

これは言いがかり。フェイクニュースです。

それをはっきりさせるために、パウロはこのあとすぐに、「ヤ
コブ」の勧めを受けいれて、

ユダヤ教の律法を大切にしていることを、行動で見せること
にしました。

それが、今日の聖書の、後半に記されている出来事です。

誓願を立てた4人の人と、一緒に身を清めて、頭の髪をそる
費用をだした、ということがそうです。

これはおそらくナジル人の誓願というものです。

律法によると、短くても 30 日は酒を断ち、死体に触れてはならず、食べてはならないものを避けて、頭にカミソリを当てない、などの誓願をすることになっています。

パウロは、この律法の教えを、自分も大切にしているということを、あえて示すために、すぐに行動しています。

パウロは、ユダヤ人に向かって、ユダヤ人が大切にしている律法や慣習など、どうでもいいなどと、言っていないし、行動していないのです。

反対に、異邦人に対しても、ユダヤの律法、慣習を守りなさいと、強制もしない。

ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のように、パウロは常に、相手の今の姿に寄り添ったのです。

それはただただ、一人でも多くの人に、あなたを愛し、救ってくださるイエス様を伝えるために。

福音を伝えるためなのです。

相手がユダヤ人であっても、日本人であっても、韓国人でも、中国人でも、アメリカ人でも、

パウロは、今、その人が大切にしていることに寄り添い、その人を無理やり変えたりなどせず、

ただただ、イエス様を、福音を伝えてきたのです。

ただただ、そのままのあなたを、主イエスは救ってくださるのだと。

日本人は日本人のままで、ユダヤ人はユダヤ人のままで、

主イエスによって救われたなら、みんな同じ天の国。神の国の住民です。

国籍は天なのです。ですから、主イエスを信じる人は、みんな「天国人」です。

だから、この地上では、なに人でもかまわないのです。

人種とか民族とか国籍は、いわば、一時的に、体にまとうだけの、服のようなものです。

ユダヤ人にはユダヤ人の服があっていいし、日本人には日本人の服があっていい。。

服は何を着ても自由です。大切なのは、中身なのですから。

羽入君が、日本人のユニフォームを着ていようと、

結局は、その人そのもの、中身が勝負なのであって、外側の服装は、なんでもいいのです。

むしろ、ただの服やユニフォームが「誇り」となって、なかみの人間が、その外側の「誇り」のために、利用されるようなことがあっては本末転倒です。

パウロという人は、出会う相手に合わせて、さまざまな服に着替えることができた、自由人でした。

パウロの振る舞いだけをみると、なんだかころころ変わっているように見えるけれども、

しかし、そうではなくて、パウロのなかでは、なにもぶれていない。一貫して筋が通っている。

もう、ユダヤ人とか、なに人とか、そういうレベルを超えて、彼は「天国人」を生きているのです。

だから、相手にあわせて、どんな服にも着替えることができた。ここに「キリスト者の自由」があります。

この「天国人」という中身がしっかりしていたら、わたしたちも、日本人という服にだけ、こだわらなくなるでしょう。

あなたも、日本人という服を着なさいと、強要したりもしないでしょう。

ほかの人がいやがる服を、ワザと着るいじわるもしないでしょう。

異邦人のクリスチャンも、ユダヤ人が嫌がることは、避けるべきなのです。

それが、今日の聖書のなかで言われている「偶像に捧げた肉と、血と、絞め殺した動物の肉を口にするのと、みだりな行い」を避けるということです。

同じ主イエスを信じる、「天国人」であるわたしたちが、
民族、文化を越えて、共に生きていくために。

互いの服を認め合い、強制したり、嫌がることをせず、
共に、一緒に、生きていけるようにと、
パウロは、このことを願っていた。それが今日の聖書の物語
が示していることです。

わたしは、山形の田舎に住んでいた頃、一つ夢がありました。
それは、教会に温泉を引いてこれないかという夢でした。

まじめに、温泉の源泉からどうやったらお湯を引いてこれる
のかと、考えていた時期がありました。

なぜ、そんなことを夢みていたのかというと、教会の礼拝に
きて、温泉にも入って、心も体も癒される教会って素晴らしい
と、思っていたからです。

実は、この夢は、今も持っています。さすがに温泉は引くこ

とは無理でも、教会の礼拝が温泉のようであってほしいという希望は、今もあるのです。

温泉は、男女は別々だとしても、みんなが服を脱いで、一緒にお湯につかってあたたまる現場ではないですか。

主イエスが十字架に死に、復活してくださった。

この私たちを救う神の愛からわき出てくる、愛というお湯。

この心も体も癒やし、力を与える、主イエスの十字架から流れ出る、神の愛の温泉に、

皆んな、自分の国のプライドとか、民族意識とか、そんな服を脱いでしまって、

一緒に入って温まる。そんな教会は素敵だと、信じているのです。

温泉に、服を脱がないではいったら、あったまらないでしょう。

もう、ユダヤ人とか日本人とか、そういう服は、教会に来たら、脱がないといけません。

自分はこんなに頑張ってきたのだとか、そういうプライドとか、誇りとか、

自分で自分を包んで、守ってきた、そんな服を脱ぎ捨てて、

お互いの弱さも欠けも、みんな見せ合い、自由になって、

主イエスという愛の温泉にはいりましょう。

互いに、神の愛のお湯で、背中を流しあって、

つまり、お互いのために祈り合って、

疲れきった心と体が癒やされて、また元気になれたならば、

わたしたちは、また立ち上がって、自分の道を、歩きつづけて行けるでしょう。

パウロは、このエルサレムの教会で、クリスチャン同士の温かな交わりに迎え入れられ、

力を与えられたことで、

このあと、ユダヤ人に迫害される、苦難の道を、歩みぬいていくことができたのです。

わたしたちも、この温かな礼拝を終えたなら、
神が一人一人に与えている、神の国へと至る道を、
ここから新たに、歩み始めていくのです。